須田　雅子

「ゲストハウス・ダーラナ」の大久保清一さん（その２）～南郷の古民家との出会い～

「ゲストハウス・ダーラナ」で話をするオーナーの大久保清一さん

東京・六本木で北欧料理店を営んでいた大久保清一さんが、スウェーデンと似た環境での暮らしを求めて奥会津をまわっていたのは、40 年近く前のことだ。スウェーデンのダーラナ地方のように水辺に近く、広い土地があればと探していた。

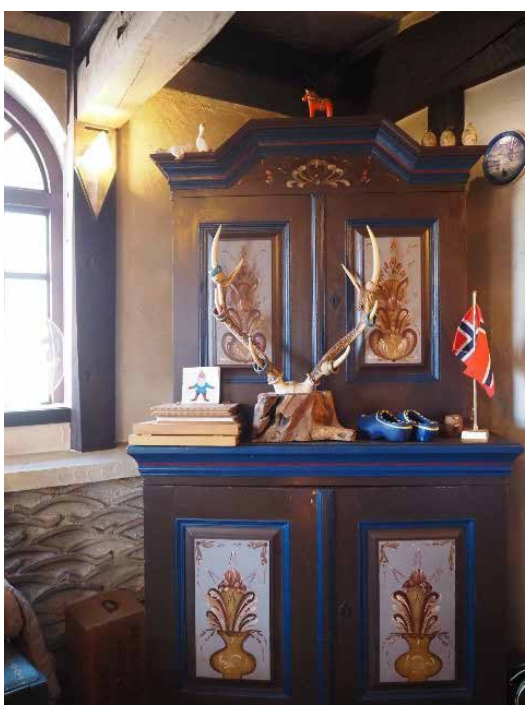
南会津町の南郷地域（当時は南郷村）には、その頃、茅葺き屋根の古民家がまだ結構残っていた。東地区の国道沿いの古民家についても、横を通りながらいつも気になっていたが、ある日、中を見てみようと思い立ち、車を停めた。覗いてみると、立派な梁があり、奥には蔵が続いている。

「これ、このまま潰れちゃうのかと思うと、すごいもったいないなあと思って。立派な骨格があって、うまくすればダーラナ地方の民家の雰囲気が作れるんじゃないかと」。この家に吸い付けられてしまった大久保さんは購入を決めた。

ゴミの量はダンプカー４台くらいになった。改築は大内宿の建築家に頼むことにした。「スウェーデンの民家のようなのを造りたいんだって建築家に言ったら、じゃあ、スウェーデンに連れてってくれって言うわけ。それで、一緒にスウェーデンに２回行ったんですよ。私と建築家の馬も合って、彼、センス良くやってくれた」。

奥には昔の暮らしを感じさせる重厚な空間も。

「スウェーデンから仕入れたこういう家具も、ものすごいガラクタだったんですよ。これ全部自分で色塗り替えて。絵はね、ダーラナから絵描きのアニタ・ハンソンさんを呼んで描いてもらった。彼女は描くのがすごい速くてね。絶対に筆が止まんない。パッパッパッパッ！と」。



スウェーデンで仕入れた古い家具。大久保さんが色を塗り、ダーラナから招いた画家が絵を描いた。

1992 年、「ゲストハウス・ダーラナ」をオープンした。昔、馬がいた場所がレストランになっている。スウェーデン料理について尋ねてみた。

「スウェーデンは海に囲まれているから、ニシンとかサーモンとかね。そういうのが一年の生活を支えている伝統的な料理。あとは挽肉料理とか。主食としては、じゃがいもの応用が驚くほどいっぱいある。私はじゃがいも料理が今でもすごい好きなんですよ」。

オープン当時から長い間、近所の一人暮らしのおばさんがゲストハウスを手伝ってくれた。「いくらお金を渡そうとしても、絶対に受け取らないんですよ。ここで手伝うことが本当に好きだったみたいで。うちのお客さんも、おばちゃん、また来たよーっていう感じで。人間の楽しみっていうか、生きがいだね。お金をもらってしまうと消えてしまうような何か。今は老人ホームに入っちゃったけど、私はこの人からすごく学びましたよ。人間性だけで生きるっていうことを考えたときにね。お金じゃないっていうことがね。うちのゲストハウスは、彼女に随分かわいがってもらった (笑)」。

大久保さんの話を聞いている間にも、近所の女性が大きな白菜を持ってやってきていた。「ゲストハウス・ダーラナ」は、ご近所さんたちとの気さくであたたかな関係に支えられてきたようだ。これを書きながらも、ダーラナのおいしい料理の味が脳裏をかすめる。あたたかくなったら、また訪れたい。

「ゲストハウス・ダーラナ」
http://dalarna.jp/guesthouse/